第４章　Task Architect の試行状況について

本章では、研究協力地域障害者職業センター（３所）における、『Task　Architect』の試行的活用状況について、ヒアリングを基に、その状況をまとめる。

第１節　職業相談における活用

１．職務内容に対するイメージ促進のための活用事例

（１）事例の概要

ア　対象者：自立支援カリキュラム受講者（統合失調症及びてんかん）

イ　職業相談での課題

自立支援カリキュラムの受講に対して積極的な意欲が認められない支援対象者に対し、漠然と持っている希望職種（イラスト会社の仕事）へのイメージを明確にすることによって、就職活動の方針を整理していく必要があった。

（２）Task Architect の活用動機

支援対象者は、認知面の低下に加え、言いたいことが言えない、周囲の話に流されやすいという傾向があった。イラスト会社の職務についてのイメージも不明確だったことから、支援対象者の相談内容を視覚的に確認できる形で提示及び保管しておく必要があった。そこで、イラスト会社の職務を視覚的に整理し、理解を促進させることができると思われる『Task Architect』を活用することとした。

（３）Task Architect の作成過程

イラスト会社の職務について、支援対象者の理解は非常に漠然としたものであったため、インターネットや図書等で、支援対象者に調べてもらうように依頼した。支援者もインターネット等で情報を収集し、イラスト会社の職務について、『Task Architect』を用いて課題分析を行い、視覚的に理解しやすいと思われる概観ツリーを作成した。概観ツリーの結果を図１１６に示す。

（４）Task Architect を活用して支援した状況

職業相談の過程で、概観ツリーによるイラスト会社の職務を提示しながら、各職務を遂行するために必要な作業能力等について認識を促し、そのために「今できること」、「自立支援カリキュラムで習得できること」、「これからしなくてはいけないこと」等の視点について検討を行った。その結果、自立支援カリキュラムを通してできること、やっていくべきことを整理することができ、SST や自立支援カリキュラム受講の必要性を認識できた。

以上のような相談を行うことで、支援対象者は、「イラスト会社での仕事」に関する職務の多様性、専門

性を理解できたことから、現段階ではイラスト会社での就職を希望しないという考えを持つに至った。現在は、支援対象者自身が対応可能な作業領域で求職活動の検討を行っている。

（5）Task Architect 活用の効果

支援対象者は、漠然とした希望職種はあったものの職種のイメージが曖昧であったために、支援対象者自身の能力と職務の遂行に必要な能力とのマッチングが難しい状況だった。しかし、『Task　Architect』を活用し、希望職種の具体的な職務内容に関する理解が深められたことによって、支援対象者の就職に対する考え方が整理され、現実的な希望を持つことができた。このように、職業に対する理想と現実のイメージをそれぞれ具体的に提示し、認識のズレを修正するための資料として『Task　Architect』の活用は効果的であったと思われる。この活用については、実際に見学することが難しい職務などを検討する際にも同様の効果が得られるのではないかと考えられる。

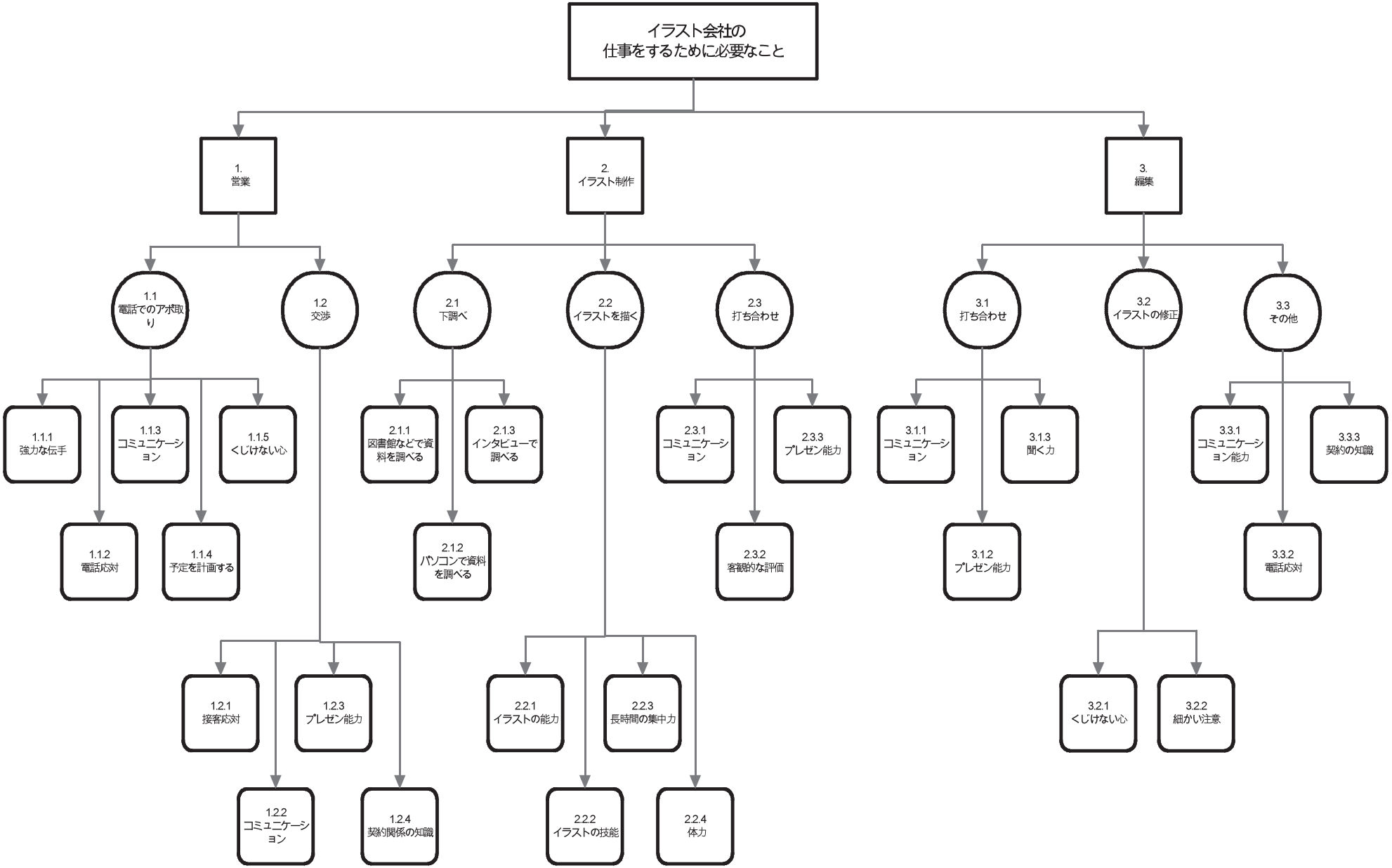

図１１６　イラスト会社の職務（概観ツリー（Microsoft® Office Visio® 使用））

２．障害の開示・非開示に対する理解促進のための活用事例

（１）事例の概要

ア　対象者：職業準備支援受講者数名（精神障害等）

イ　職業相談での課題

職業相談を実施する過程で、就職活動の進め方（障害の開示、非開示とそれぞれのメリット・デメリット）に対する理解と整理が困難な支援対象者に対し、就職活動の方向性を現実的に検討できるよう支援していく必要があった。

（２）Task Architect の活用動機

上記の課題を持つ支援対象者が数名いたことから、支援対象者に対する職業相談が円滑に進むように、視覚的に課題を整理できる『Task Architect』を活用することとした。

（３）Task Architect の作成過程

精神障害に関する情報を事業所に対して開示するか、もしくは非開示にするかによって、求人開拓から職場定着に至る過程が異なることを図１１７にまとめた。公共職業安定所（以下、「安定所」という）を利用し、精神障害を開示して就職活動をした場合と、障害を非開示にした場合の就職活動との相違点や共通点を「課題の強調」機能を利用して、ボックスの色で強調した。また、色がついていないボックスは、開示、非開示による分岐点であり、活用できる支援制度や支援体制に違いがあることを明確にした。

（４）Task Architect を活用して支援した状況

職業相談の中で精神障害や高次脳機能障害を有する支援対象者数名に対して活用したが、相談内容が多岐にわたっているため、相談経過の一部を図式化したほうが、問題の整理には役立つようである。特に、障害の開示、非開示の選択に関する相談過程で、『Task　Architect』を活用することは効果的であった。障害を開示して就職活動する場合には、受け入れ先事業所の開拓に時間を要することや、職業選択の幅が狭小化される傾向にあるため、就職活動の過程で、非開示を選択する者も少なくない。無論、この選択は尊重されなければならないが、非開示を希望する数人の支援対象者に対して、図１１７を基に職業相談を行ったところ、支援制度の活用や支援体制が強化されるというメリットがあることの理解が促され、その結果、非開示に固執せず、障害を開示する方向での就職活動について検討したい旨の希望が担当カウンセラーに寄せられた。

職業相談の際に活用する資料は、手引きやマニュアル類が多数あり、また、他のアプリケーションソフトを利用して図式化した資料を用意することも可能であるが、『Task　Architect』を活用して、当該資料を作成したカウンセラーからは、「フローチャートを作って図示しながら職業相談を進める場合には、『Task Architect』が使いやすい。リストビューさえ作れば概観ツリーが自動的に作成されるし、必要と思われる情報を、後から入力して整理できる。必要な部分だけを提示しながら相談ができた」という感想が寄せられている。

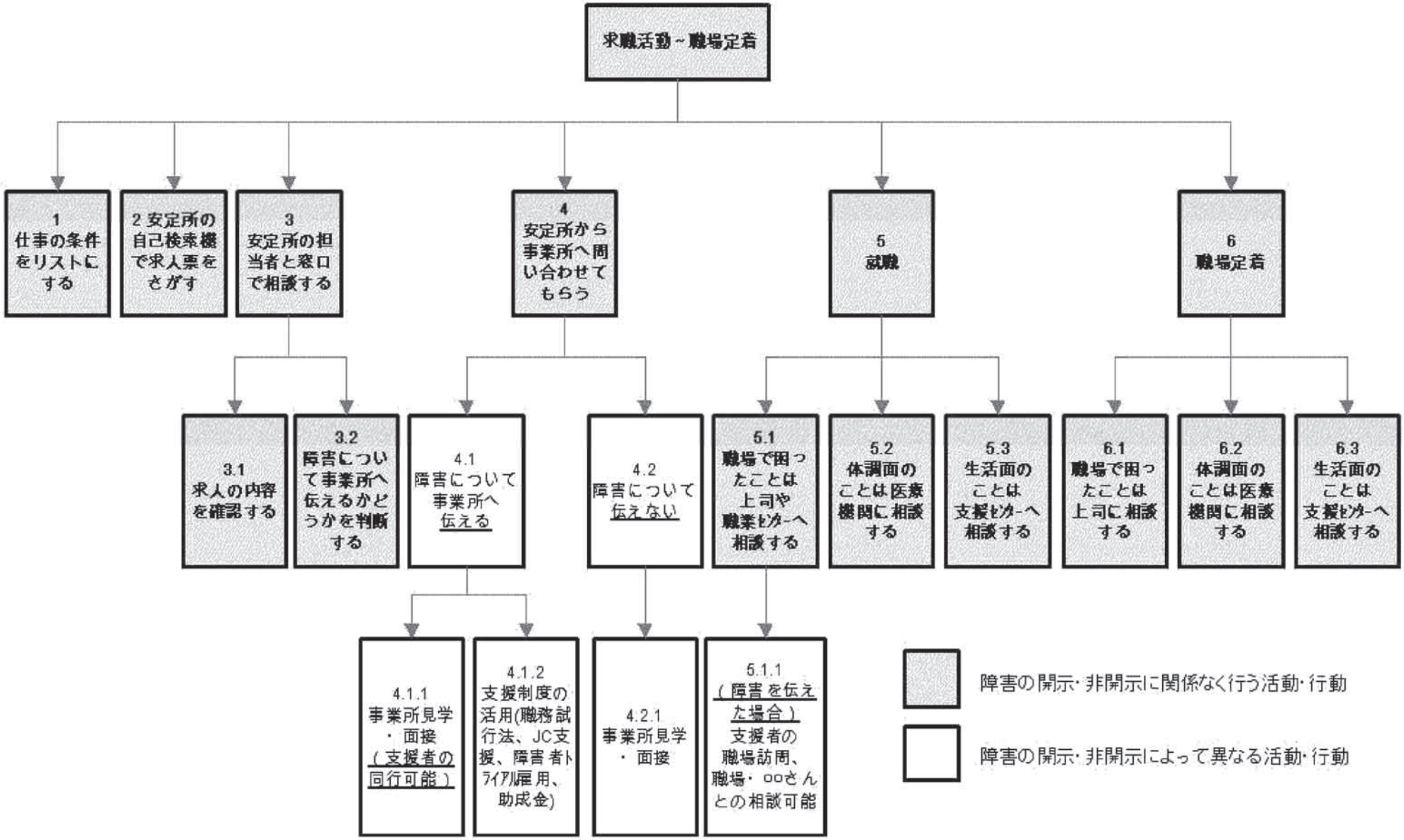

図１１７　職場定着に至る過程（概観ツリー（Microsoft® Office Visio® 使用））